

石川県内の幼稚園における英語活動の現状と

英語活動の位置づけに関する一考察

— 石川県の幼稚園へのアンケート分析をもとに —

Present Condition of English Time at Kindergartens in Ishikawa
and its Position in the Kindergarten Curriculum

— Based on Replies to a Questionnaire Distributed
to Kindergartens in Ishikawa —

池 中 雅 美

要旨

石川県の幼稚園にアンケート調査を行い、幼稚園での英語活動の現状を調べた。石川県内の幼稚園の中でどのくらいの幼稚園が英語活動を実施しているか、また実施している場合の内容、頻度、指導者、指導形態などをアンケート結果を基に分析した。幼稚園のカリキュラムに英語活動を組み込んでいる幼稚園と課外の活動として英語活動を捉えている幼稚園がある。カリキュラムの枠内に英語活動を位置づけることの意味を探った。この後、幼稚園における英語活動の内容を調査し、リズム指導に焦点をあてる。リズム指導がなされているか、どのような教材を用いて指導しているかを、それぞれの幼稚園への活動参観、インタビューを実施し、第2回目のまとめを行う予定である。

1. はじめに

金沢市が2004年に「小中一貫英語教育特区」に認定され、小学校3年生から教科としての英語教育がスタートした。小学校1、2年生においては朝のショートタイムや総合学習の時間を利用して英語活動を行っている。小学校1、2年生でも活動を行う標準時間が年間10時間となっている。小学校における英語学習に関してはさまざまな研究がなされている。早期英語学習の有効性は、発音面だけではなく、学習態度の面についても見られるという結果が多く得られている。JACETプロジェクトチームは1985年から調査を開始しており、その研究発表が研究紀要等でなされている。

このような状況の中で、英語活動を行う幼稚園が増えてきている。石川県の幼稚園のホームページを調べてみると、67園中42園の幼稚園で英語活動を実施していることが確認できた。実施率62%である。幼稚園で英語活動を行う意義は何か。筆者は幼稚園における英語活動は、現

在の小学校での英語活動、英語科教育の前倒しのようなになされるべきではないと考える。幼稚園は、指導要領に基づいたカリキュラムのもと、それぞれの幼稚園が独自性をだしながら教育にあたっている。個々の幼稚園において英語活動が、幼稚園全体のカリキュラムの中でどのような位置づけとして扱われており、どのような目的をもって取り入れられているのかを把握することがまず必要であると考え。そこで本研究においては、アンケート調査から得た回答を基に、幼稚園のカリキュラムの中での英語活動の位置づけ、また活動の意義を探りたい。

次に、それぞれの幼稚園でさまざまな英語活動が行われているが、その英語活動の中でリズムの指導はされているか、どのような活動がリズム指導として効果があるのかを研究したいと考えている。幼児期においては英語のリズム指導が非常に大切な要素であると考え。英語独特のリズム習得のためにはどのような活動に効果があるのかを、各幼稚園で行われている英語活動の参観、またインタビューを通して考察したい。リズム指導については本稿ではなく、次の論文でまとめる。

2. 小学校英語と幼稚園英語

まず、小学校英語について、小中一貫英語教育の特区となった金沢市の小学校についてであるが、平成17年度より小学校で、また平成18年度から中学校で、小中一貫英語カリキュラムが完全に実施されている。特区認定を受けたことにより、小学校においては、小学校3年生以上に、年間35時間の「英語科」が設置され、英語を教科として授業が行われるようになった。また、この時間以外に、週1回以上15分程度のショートタイムによる指導が実施できるようになっている。指導内容としては、3年生以上で金沢版の小学校副読本を、6年生では中学校1年生の英語の教科書を教材として使用し、中学校1年生前期程度の内容を指導することになった。このため、いままで中学校で使用していた中学校1年生のニューホライズン1の教科書が小学校で配布されている。指導体制に関しては、小学校の英語指導講師や英語インストラクターは、試験を実施し合格したものだけが各学校に配置されたり、ALTの数を増やすことで充実を図っている。また、英語を指導する技術あるいは教員自身の英語力を向上させることができるような小学校教諭への研修制度もある。

小学校英語の必修化に向けて着実に準備がなされている。しかし、幼稚園での英語活動についてはあまり目を向けられていない。小学校における英語が研究の対象となることが多く、幼児期の英語導入についてはまだ研究が少ないのが現状である。幼稚園という時期から英語活動を行う利点としては、よりよい発音の習得の可能性があるということがあげられる。音に関しては、七田(1986)が絶対音感が右脳の能力の一つにあり、それは満6歳までに身につけるべきであると主張している。また、大脳の発達に関して船津(2005)は次のように述べている。「脳は脳幹と大脳辺縁系(古い皮質)と大脳新皮質(新しい皮質)の3層に分かれており、音を聞き取るのは古い皮質で処理される。そして旧皮質と新皮質の間には6歳くらいまでを境に壁が作られる。つまり、6歳以前に耳にしたことのない音はこの壁にはじき返され、古い皮質にたどりつかなくなるということが、聞き取れない根本的な理由」としている。また、トマティス博士は「聞こえる音しか発音できない」とし、「人間は20ヘルツから20,000ヘルツの音を聞き分ける能力を持って

いるが、幼児期に限ったことで、日ごろ耳にする周波数領域しか聞き取れなくなっていく。したがって、1,500ヘルツくらいまでの周波数領域の日本語を聞いて育つと、それより高い周波数領域を持つ英語は聞き取りにくくなる。」と述べている。このことから、早い時期から英語の音に触れさせることにより、より英語母語話者の音に近く通じやすい発音の習得が期待できる。

英語学習の開始時期、あるいは発音に及ぼす影響なども研究されている。どの年齢から異言語の学習を始めるべきか明確な結果はでていないが、西尾(2000)の調査によると、音素の発音の正確さは小学校1年～3年から始めると効果があるという結果を得ている。また、学習経験が音素の発音に及ぼす影響を調査した結果、年齢以外の要因として学習経験の長さを挙げている。西尾は、「Flege, Bohn, and Jang(1997)はアメリカに住んでいるドイツ人やスペイン人などを対象に滞在期間の長短で2群に分け、期間が長い群(言語経験あり群)と短い群(言語経験なし群)より、英語の母音の聞き取りと発音において正確であることを明らかにした。このように、英語の学習経験の長さが発音の正確さに影響を与えると考えられる。」と述べている。

また、英語学習への態度と動機については、JASTECプロジェクトチームが早期に英語を学習した群とそうでない群で、早期英語教育の効果を調べた調査がある。それによると、早期英語学習は外国語学習に対する学習意欲を高める役割を果たしており、外国人とのコミュニケーションに対する積極的な態度を育む上で大きな役割を果たしているという結果を得ている。しかし、横山(1991)の調査によると、英語を学習した群とそうでない群ではさほど顕著な差がみられなかったと結論付けている。その理由として2つ挙げている。ひとつは習った期間が1～2年と短期間であった点、もうひとつは指導の方法とカリキュラムとしている。言語の学習は継続的に行い、かなりの時間を費やす必要がある。その点、1～2年だけではあまり差があらわれないのは当然といえる。また、横山(1991)の調査では、指導の方法とカリキュラムについては細かく調べられていないが、「教えられた内容は英語力そのものを育てるというより、むしろ英語に親しませるための内容が中心になっていたようである。」と記述され、英語を早期に学習した群とそうでない群の差がなかった理由づけとしている。言語学習にはかなりの量の時間が必要である。また、学習内容が英語に親しむための内容では効果が得られなかったということがわかる。早期英語教育を受けることによってそれ以降の英語学習への動機付けがうまくいくかどうかは、時間と学習内容が大きな割合を占めているといえる。この点からも、幼稚園の時期から、カリキュラムの中に組み込んで英語活動がなされるべきであると考えられる。

3. アンケート結果および分析

3.1 回収率と実施数

石川県内の67箇所の子園にアンケートを送付し、41通回収した。回収率は61%である。しかし、それぞれの幼稚園のホームページを見ると、アンケートを回収した幼稚園以外にもかなり多くの幼稚園で英語活動を実施していることがわかった。今回のアンケートの結果が約6割の回答分析となる。

回答のあった41箇所の幼稚園のうち、英語活動を実施している幼稚園は30園であった。実施率は73%である。回答が回収できなかった幼稚園のホームページ等ではさらに多くの幼稚園

で英語活動が実施されているということから考えると、実際の実施率はさらに高くなることが予想される。金沢市の小学校においては英語教育が始まっていることから、多くの幼稚園で英語活動が実施されているだろうと予想していたが、石川県全体でこれだけ多くの幼稚園で英語活動が実施されているということは、英語教育に関して関心が高いということがいえるだろう。また、幼稚園児の保護者の関心が高く、幼稚園もその要望にこたえるため取り入れているという理由も考えられる。青森県の公立・私立の全幼稚園への調査をおこなった研究(坂本ほか 2003)では、アンケート回収率は79.5%と高く、英語活動の実施率は市部で54%、郡部で55%と報告されている。2003年での報告ということもあって現在はより多くの実施園があると予想されるが、それに比べて石川県の幼稚園での英語活動の実施率が高く、英語活動に対する意識が高いのは、金沢市が小中一貫英語教育特区となったことが大きく影響していると考えられる。

アンケート結果によると、英語活動を取り入れていない園は11園である。英語活動を取り入れていない理由としては大きく分けて二つの理由が得られた。第一に指導者がいないため取り入れたいと思っているが現実には取り入れていない場合、また、保育形態と方針にあう英語活動を模索中とする場合で、英語活動には肯定的な見方をしていると考えられる。第二に、幼稚園で英語活動を取り入れる必然性、必要性が見出せない、限られた時間で英語活動より大切な活動を行いたい、母語の習得をしてからで十分ではないがという、早期英語教育自体には反対とする理由が挙げられている。

3.2 英語活動の内容について

3.2.1 どの年齢で英語活動をおこなっているか

英語活動を行っている30園のうち、年長児のみに英語活動を行っているのは、7園、年長と年中におこなっているのは11園、年少にも英語活動を行い、全部の年齢で行っているのは12園と一番多かった。年齢別にクラスを設けて実施している園がほとんどだが、中には年長と年中を合同で行っている園もある。また年齢によって英語活動の時間を多く割いたりあるいは少なくしたりして工夫が見られる園もあった。

英語活動を実施しているすべての幼稚園が年長には活動を行っていることがわかる。年少にも活動を行っているのが12園と全体の4割となっている。すべての年齢で行っている場合、効果的な活動とするためには、年齢ごとのカリキュラムを作成し、積み重ねによって活動が実施されているかどうかを検討する必要がある。また、年齢によって活動の時間が異なっているのは、子どもの発達段階を考慮すると、年齢によって集中できる時間が異なっているためであると考えられる。

筆者が関わっている幼稚園では年長と年中を合同で行っている。年齢差によって理解力が異なり、年齢的な発達も違うため英語活動は行いにくい部分がある。年齢別のクラスで行うことが理想であるが、合同で行うことの利点もある。年長の子どもが年中の子どもをリードすることがある。年長の子どもたちが楽しそうに活動に参加することで、はじめは声にだすのをためらっているような子どもでも、その雰囲気につられて発話するようになるということが期待できる。また、スパイラル方式で指導内容を繰り返すことにより、定着が図りやすくなると思われる。同じ文型、

語彙を用いる内容であっても、その導入方法、アクティビティやゲームのやり方を変えることによって子どもたちの興味を引くことができると考える。

4.2.2 実施回数について

実施回数はそれぞれの園の状況によってかなり異なっている。言語の学習は定期的に継続する必要がある。実施回数は、英語活動をどのようにとらえているのか、英語活動の目的をどこに置いているかということがあらわれている。実施したくてもできないという場合もあるだろうが、実施回数は英語活動そのものの意味をどのようにとらえているかが示されている。

英語活動を週1回行っている園が一番多く10園あった。定期的に行う形態をとっている園が多いということは、英語活動を幼稚園での生活の中に組み込まれていると考えてもいいのではないだろうか。これがカリキュラムに組み込まれているかいないかは別であるが、子どもたちにとっては、月に1回や2回行われる特別な活動というのではなく、週1回定期的に行われる英語活動を、幼稚園での日常的な生活の一部として認識しているのではないかと思われる。

このほかは、月に1回が5園、月に2回が7園、月に2～3回が2園、年に3回～4回が1園、週5回という園が1園であった。この週5回実施している園は英語コースを設置している園である。

4.2.3 指導者について

活動の指導にだれがあたるかは大きな課題である。今回のアンケートでは、日本人のみが5園、日本人と外国人のチームティーチングをおこなっているのが11園、外国人のみが14園と一番多かった。日本人のみとなるのは、外国人を確保できないという状況があるかもしれないが、日本人とのチームティーチングや外国人のみの指導が確保できているのが25園と圧倒的に多い。

外国人を指導者とする理由はのひとつに、外国人という異質な存在に触れさせる、慣れさせるということを目的としていることが考えられる。異文化に触れる経験をさせることで、異なった事柄や人を受け入れる姿勢を幼児期に形成することが可能である。またそのことは自己肯定にもつながる。

しかし、外国人のみで指導を行う場合、英語のみで日本語を介さず子どもたちが英語の指示を理解できるかどうかは疑問である。その点、日本人とのチームティーチングでは、理解ができない部分についてすぐに日本語での補助ができる点、チームティーチングは効果的であると思われる。また、教育を専門とする日本人が指導にはいることでより適切に日本語での補助が可能である。

4.2.4 カリキュラムに組み込まれているかそうでないか

英語活動をカリキュラムの中に組み込んで実施している幼稚園と、カリキュラム外に位置づけ英語活動を実施している幼稚園がある。英語活動がカリキュラム外となっているのは15園、カリキュラム内となっているところは15園あった。実施している幼稚園の英語活動の扱いについては2分した。前述した青森県の調査では、英語活動の位置づけをカリキュラムの一環としているのが6割以上という結果であった。保育活動の一部として英語活動を捉えている幼稚園がかな

り多いということである。

以下に今回の回答で得たそれぞれの理由を挙げる。

カリキュラム外とする園での英語活動の位置づけ

- ・英語に親しみ楽しむ程度で行っているため
- ・課外活動として
- ・楽しく正しい英語で世界を知ってもらおうと思っている
- ・英語教室をしているため
- ・外国人と触れ合うことを目的としているので定まったカリキュラムはなく先生とゲームをしたり、時には年長の活動を一緒に取り組んだり柔軟なやり方で行っている。
- ・市教委のALTの都合にあわせているため年数回しかできないので、英語に触れる程度しかできないと考えている。
- ・外国の方と一緒にすごしたりする中で英語に触れたり、外国の方に接することによって慣れるというひとつの環境としてとらえている。
- ・英語活動として独立したもの
- ・小さい時から生の英語に親しみ、興味を持ってもらえればよい。
- ・幼保連携活動の中で

英語活動がカリキュラム内に位置づけられている園

- ・英語に親しみ楽しむ
- ・カリキュラムの別表に取り扱っている。年齢ごとに親しめる程度で年長児は発表会で簡単な英語劇を演じる。
- ・ゲーム中心
- ・人間関係、言語
- ・カリキュラムは英語指導の先生にまかせてある。(ミーティングを行い、指導の責任者と話し合い、その年度のカリキュラムについて相互理解をしている)
- ・5歳児卒業までに簡単な挨拶、自己紹介などができる目標を定めている。普段の生活の中で生活に根ざしたとき、場所などをみつけて一緒に活動している。
- ・「英語に親しむ」を目標に月1回、耳を通して聞く、歌やゲーム、絵本を通して楽しんでいる。
- ・子供の経験を増やし、英語に親しむことを年間を通しての目標にしているため、幼稚園のさまざまな活動のひとつとして行事欄にあげている。
- ・英語と外国人に対しておじけづかないようにプレッシャーを感じないように。幼児期に国際人としての素養がみにつくように、遊びの中に劇、歌を通して楽しませています。
- ・言語、表現、コミュニケーション、音楽等、遊びの一貫で行い、ゲーム感覚で遊び楽しんでいる。
- ・国際人の方と触れ合ったり、異文化にふれあい味わいます。
- ・外国人とのふれあいを通して簡単な英語に触れる。簡単な英語を使って遊びを楽しむ。

歌やゲームなどを通して「英語に親しみ、楽しむ」という点については共通であるが、やはり

カリキュラムの中に英語活動を位置づけた場合は、具体的な目標を掲げ、活動がなされているということがわかる。英語劇が発表できるように、あるいは簡単な挨拶、自己紹介ができるように目標を定めることで、英語学習の継続的、体系的な指導が可能になると考える。また、行事などとの関連性を持たせることで、日常生活の中で自然と、英語という言語を通しての経験をすることができると考える。子どもたちは日本語で行われている事柄と英語とを関連付けて学習することが可能である。Peter Doye(2004) は、小学校教育について、「カリキュラムの一部に組み込むことは、外国語の教科が一つ増えるのではなく既存の諸教科に新しい次元を加えればよい」と述べている。全体的学習、つまり、holistic な学習を基本理念としている。

Holistic な学習とするには、例えば日本語で歌った歌を英語で、あるいは日本語で読んだ絵本を英語で読むなど普段の保育内容を英語に置き換えて行うことが考えられる。以前、英語活動でかかわった幼稚園で、子どもたちが大好きで読んでいた日本語の絵本を、ネイティブスピーカーの助けをかりて英訳し、英語活動に使ってみた。非常にうまく活用でき、子どもたちの声が大きく発話されるようになり、繰り返し読んだことがある。このように幼稚園での保育内容、行事などと関連づけることによってより効果的に英語活動が行えるのではないかと考える。

小学校英語学習指導指針で、小学校での英語学習の目的は、「国際コミュニケーションの基礎確立」、「国際性の育成」の2つが挙げられている。では幼稚園ではどうだろうか。小学校の単なる前倒しではいけない。発達段階を考えた上で、目的を設定し、カリキュラムを作成する必要がある。

幼稚園教育要領が平成10年に改定された際、基本方針のひとつとして「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」(幼稚園教育要領解説 文部科学省

2004) という文章が挙げられている。英語という異なった言語を話す人たちを通して、異なった文化に触れ、人間性を豊かにし、さまざまな人たちと出会い、その中から社会性を見につけ、自分は日本人であるということに気づかせ、自己肯定ができるようになると思う。

5. まとめ

今回は石川県の幼稚園を対象としてアンケートへの回答を依頼し、その結果からある程度の現状が把握できた。かなり多くの幼稚園で英語活動が実施されており、その中でもカリキュラムの中に位置づけられている幼稚園が半数もあったことは、英語学習への関心が非常に高く、保育内容の中に英語の必要性を認識しているということが言える。

外国語学習の意義について、カーペンターとトーニー (Carpenter & Torney, 1974) は以下のように述べている。

外国語に触れることによって児童の異文化能力が養われることを示唆している。外国語をとおして児童が異文化に接することで、国際感覚を磨くことができる。

また、サヴィニョン (S. Savignon, 1983) は次のように述べている。

外国語を話せるようになることは、人間社会に自己を位置づけることを意味する。つまり、文化や言語の境界を越えた人々に関心を持つ、ということである。言語は単なる記述の対象以上のものである。それはわれわれと世界を結ぶ重要なきずなである。それは民族と民族を交流させる手立てとなる。

外国語を学ぶ、外国語に触れるということ、子どもたちはその経験を通してより成長していくものであると考える。異文化に対して、また外国人に対して、異なったものや人を受け入れる姿勢を持てるようになり、ひいては自己を肯定的に受け入れられるようになるのが、英語活動を幼稚園から導入する目的、意義であると思う。

幼稚園における英語活動は楽しくなければいけない。楽しさを経験することでもっと知りたい、もっと活動をしたいという思いがさらなる英語学習へとつながり、それ以降の学習への動機付けとなると考えるからである。言語学習には長い時間がかかる。しかし、ただ時間だけかけるのでは効果は期待できない。学習内容、指導者など多くの課題はあるが、幼稚園において英語活動を行う意味はある。特にリズム指導については幼児を対象とした調査、研究が少ない。石川県内の幼稚園で行われている英語活動の指導内容で、リズム指導に焦点をあて調査を行い、研究を続けていきたいと考えている。

参考文献

- 上野 直子 「宮崎市の早期英語教育の現状」『宮崎女子短期大学紀要』 第13号 1987年 p.1-28
- Curtain, Helena & Pesola, C.A.B Languages and Children: Making the Match, second edition, Longman Publishing Group. 1994 (伊藤克敏ほか 『児童外国語教育ハンドブック』 大修館書店 1999年)
- 坂本 明裕 成田 恵子 福土 洋子 「幼稚園における英語教育の実態と保育学科での「幼児英語指導法」の必要性 -青森県内幼稚園における英語教育実施状況に関するアンケートをもとに-」『青森明の星短期大学研究紀要』 第29号 2003年 p.103-124
- 佐藤 香苗 「子どもたちに楽しい経験を? -日本における英語活動の現状と問題点-」『東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要』 第2号 2005年 p.59-68
- 七田 真 「幼時の大脳発達からみた早期英語教育の重要性」『日本児童英語教育学会研究紀要』 第5号 1986年 p.21-28
- 高木 亜希子 「早期言語学習経験が英語学習動機づけに及ぼす影響 -公立中学生の調査-」『日本児童英語教育学会研究紀要』 第22号 2003年 p.47-71
- Doye, Peter 「小学校における外国語教育」吉島茂訳 『外国語教育Ⅲ』 -幼稚園・小学校篇- 朝日出版社 2004年 p.68-82
- 中山千章 「幼児教育における英語 つくば国際短期大学附属幼稚園における「英語の時間」の授業及び早期英語教育について」『つくば国際短期大学紀要』 31 2003年 p.40-51
- 西尾 由里 「年齢要因および学習経験が音素の発音に及ぼす影響について-公立小学校を対象として-」『日本児童英語教育学会研究紀要』 第19号 2000年 p.1-15
- 樋口 忠彦 「早期英語学習が学習者の英語および外国語学習」における態度と動機に及ぼす影響」

石川県内の幼稚園における英語活動の現状と英語活動の位置づけに関する一考察

『日本児童英語教育学会研究紀要』 第13号 1994年 p.35-48

平尾 美智子 「英語教育は小学生や幼児にとって必要か」 『日本保育学会大会発表論文抄録』 第55号 2002年 .80-81

福本 一 「早期英語教育：指標と実践」 『Asphodel』 4号 1971年 p.1-33

福本 一 「早期英語教育 -その「功罪」をめぐって-」 『Asphodel』 7号 1974年 p.60-73

船津 洋 『Hello, Mommy!』 七田真監修 2005年 総合法令出版株式会社

本多 吉彦 「早期英語教育とその利益」 『文化女子大学紀要』 2003年 p.23-31

恵 達二郎、横川 博一、三浦 一朗 「早期英語学習経験者の中・高における成績」

『日本児童英語教育学会研究紀要』 第15号 1996年 p.27-35

山内 圭 「幼稚園・保育園での英語教育の取り組みについて (1)」 『新見公立短期大学紀要』 第20巻 1999年 p.183-198

横川 東 「早期英語教育の効果に関する一研究」 『九州女子大学紀要』 第27巻第1号 1991年 p.83-95

横川 東 「幼稚園における英語教育の効果についての研究」 『九州女子大学紀要』 第35巻3号 1998年 p.1-17

資料：アンケート用紙

幼稚園英語活動に関するアンケート

幼稚園名：

記入ご担当者氏名：

記入ご担当者役職名：(例) 園長、年長担任、年少主任等

1. 貴幼稚園では英語活動を取り入れていますか。 はい いいえ

2. 1で「いいえ」と答えられた方へ

英語活動を取り入れない理由をお書きください。

今後英語活動を取り入れる予定はありますか。 はい いいえ

以下は1で「はい」と答えられた方に回答をお願いいたします。

3. 英語活動はどのくらいの頻度で行っていますか。

週 () 回

月 () 回

その他

4. どのような形態で行っていますか。

(1) 指導者： 外国人のみ 日本人のみ 外国人と日本人のチームティーチング

(2) 時間 (何時から何時まで何分間)： 時から 時まで 分間

(3) 何歳児クラスで実施： 年少 年中 年長 年齢で分けていない

5. カリキュラムについて

(1) 幼稚園全体のカリキュラムの中に英語活動が入っていますか? はい いいえ

(2) (1) で「はい」と答えられた方へ

カリキュラムの中に英語活動はどのような位置づけですか。

(3) (1) で「いいえ」と答えられた方へ

カリキュラムの中に英語活動が入っていない理由をお書きください。

6. 調査研究終了後(来年)に調査結果・研究結果の送付を希望されますか? はい いいえ

お忙しい中、アンケートにご協力いただきありがとうございました。